



地神(じのかみ) 遺跡

—丘陵に囲まれた小盆地の集落址—

1981.3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

地神(じのかみ) 遺跡

—丘陵に囲まれた小盆地の集落址—

1981.3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

農地の土地基盤を整備し、経営の近代化により農業振興を図る為の農村基盤総合整備事業が富田地区で実施され、昭和55年度には五反田工区の工事が施行されました。

この地区内には地神古墳、地神遺跡の重要な遺跡があるため工事の実施に先立って緊急発掘調査を実施したものであります。

地神古墳の周辺には早くから表層面より縄文、弥生時代の土器、石器が散見されていたこともあり重要な遺跡であるため、この調査にはその成果に大きな期待をもって当りました。

調査の結果は、縄文中期より弥生、古墳、平安、中世の永い時期に亘っての住居址20戸、竪立柱建物址1、土坑4の遺構や多量の土器石器の出土を見ることが出来、中でも炉の底部に土器を張りつめた大形の石囲炉は珍しいものであり、鉄製紡錘車等も発見されて、この地区が丘陵地帯の盆地の中で生活や農耕の通地であったことなどが判明し得たことは大きな成果であったと思います。

調査に当っては、考古学に深い造詣のある佐藤勉信団長を始め調査員、作業員のご努力と、構造改善実行委員会、土地所有者のご理解ご協力によって行なわれ、又報告書作成については佐藤団長の綿密なる調査結果を集録したものであり、この報告書が遺跡解明の学術書として記録保存の為大切な資料であることを確信いたします。

ご協力下さいました各位に衷心より御禮を申し上げ序とします。

1981年3月

番木村教育委員会

教育長 下 岡 輝 男

例 言

1. 本書は昭和55年度喬木村下富田地区の農業構造改善事業に伴う地神(じのかみ)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集及び執筆は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作成は佐藤・牧内が、遺物の作図は2号・20号址は山下誠一・6号址出土菊川式壺は藤田典夫の応援を得、他は佐藤が、製図は田口が分担した。遺構・遺物の写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうちピット内の数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
5. 遺物は喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

遺 物 図 目 次

序	1
例言	2
目次	2
遺物図目次	2
I 環境	3
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境	3
II 発掘調査経過	6
III 発掘調査結果	8
(I) 遺構・遺物	8
1. 住居址	8
(1) 縄文時代中期中葉	8
(2) 縄文時代中前後半	10
(3) 弥生時代後期	12
(4) 古墳時代	17
(5) 平安時代	20
(6) 中世	21
2. 建物址	22
3. 土坑	22
4. 地神古墳北周溝	23
5. 遺構外の遺物	23
(II) 地神遺跡出土石器一覧表	24
IV まとめ	26
遺物図	28
図版	
I 遺跡	II 遺構
III 遺物	IV 発掘スナップ
調査組織	
おわりに	

図26 地神8号住居址出土遺物(1:4)	28
図27 地神16号住居址出土遺物、遺構不明伏壺(1:4)	28
図28 地神1号住居址出土遺物I(1:4)	29
図29 " " II(1:4)	30
図30 " " III(1:4)	31
図31 地神9号住居址 " I(1:4)	31
図32 " " II(1:4)	32
図33 " " III(1:4)	33
図34 地神14号住居址 " (1:4)	34
図35 地神1号住居址出土石皿、石棒、地神古墳周辺出土縄文時代遺物(1:4)	34
図36 地神2号住居址出土遺物(1:4)	35
図37のI 地神3号住居址出土遺物(1:4)	36
図37のII " 5号 " (1:4)	36
図37のIII " 7号 " (1:4)	36
図37のIV " 10号 " (1:4)	36
図38 " 6号 " (1:4)	37
図39のI " 11号 " (1:4)	38
図39のII " 12号 " (1:4)	38
図39のIII " 13号 " (1:4)	38
図40 地神15号住居址周辺出土弥生後期・古墳時代遺物(1:4)	38
図41のI 地神4号住居址・遺跡南西端出土遺物(1:4)	39
図41のII 地神19号住居址出土遺物(1:4)	39
図41のIII " 18号 " (1:4)	39
図42 " 20号 " (1:4)	40
図43 " 17号 " (1:4)	40
図44 地神建物址I出土遺物(1:4)	40
図45 地神土坑1号・2号・3号出土遺物(1:4)	40
図46 地神遺跡出土 土偶、小形土器・石器、鉄器他(1:3)	41
図47 地神1号・9号・2号・5号・11号上層及び周辺出土遺物(1:3)	42

I 環 境

1. 自然的環境

地神(じのかみ)遺跡は長野県下伊那郡富田下富田地神に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈、西に木曾山脈が連なり、その中央を天竜川が南流し、両岸に河岸段丘が発達しているのが伊那盆地である。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面が発達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の西岸一竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で幅員も全般的に狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく喬木村では北から城原・燗牛原・伊久間原と続く中位洪積段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と段丘面は続くが、それ以南は小河川の侵蝕により段丘面は削られ、小段丘を残すのみとなっている。伊久間原段丘面の上位に大原段丘があり、さらに高位の伊那谷第1段丘の机山(610m)の残丘があって、その背後は九十九谷と呼ばれる深い侵蝕崖となるが、東は伊那層よりなる丘陵が高まって続く。この丘陵の東側に断層縦谷により形成された集落、富田があり、さらに南東に飯田市上久堅がある。

富田地区は周囲を丘陵に囲まれた盆地状の地形にあり、背後に伊那山脈の鬼面山(1887m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)が聳えている。富田への道路は一つは九十九谷の侵蝕崖下を上るか、一つは飯田市下久堅北端北原部落から庚申原を通り、丘陵の峠を越えるが幹線道路である。

遺跡のある下富田地区は比較的平坦地形をなし、南を富田沢川が西流し、その北側に東西方向に道路に沿って集落が展開している。その集落の北側に地神遺跡がある。

微地形をみると、遺跡の北は富田沢川の旧流路を示すとみる低地帯が東西に続き水田地帯となっており、遺跡は氾濫堆積の下層は礫層、上層は川原砂の堆積となっている。南側は緩傾斜面をもって富田沢川へと落ちており、その侵蝕は緩やかなものであるが、西に向うに従い西の丘陵帯を挟ぐる深い侵蝕谷を形成し天竜川へ注いでいる。遺跡は下富田盆地の中央部の東西方向の鞍部に立地しており、標高550m～555mを測る。

2. 歴史的環境

喬木村における主要遺跡は多く、天竜川沿岸の沖積下位段丘面に立地する阿島遺跡は弥生中期の阿島式土器の標準遺跡であり、中位洪積段丘に立地する燗牛原遺跡群は縄文時代中期から弥生時代にいたる大遺跡であり、特に方形周溝墓群は注目される。伊久間原遺跡群は縄文早期末から各時代にわたる発掘調査と畑灌水工事立合調査により確認され住居址は380に及ぶ大遺跡である。その上位段丘にある大原遺跡では縄文中期中葉住居址8、集石炉2が発掘調査され、有舌ポイントの出土をみている。机山南西地帯には江戸時代後半の富田窯址があり、調査されている。

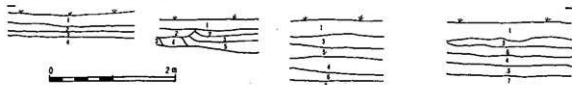
大原から富田にはいる峠の南の丘陵頂に中世富田城跡があり、ここより富田集落は一望される。下富田



図1 地神遺跡位置図、周辺の主要遺跡図I

- | | | | | |
|---------|---------|--------------|------------|-----------|
| 1. 地神遺跡 | 2. 阿鳥遺跡 | 3. 婦牛原遺跡群 | 4. 伊久間原遺跡群 | 5. 大原遺跡 |
| 6. 富田窯址 | 7. 富田城跡 | 8. 下塚・市場遺跡 | 9. 富田窯址 | 10. 神ノ峯城跡 |
| A 郭1号墳 | B 坂山古墳群 | C 小平古墳1・2・3号 | D 市場古墳 | |

図2 地神Aグリッド別土層図



1. 耕土 (砂質暗黒色土)
2. 茶褐色土 (砂質)
3. 赤褐色土 (鉄分を含む)
4. 黒褐色土 (砂質礫を多く含む)
5. 黒褐色土 (砂礫か)
6. 黒褐色土 (砂質)
7. 暗褐色土 (沼状の堆積)



図3 地神遺跡地形図及び周辺遺跡 (1:25,000)

1. 地神遺跡
 2. 富田城跡
 3. 馬場平遺跡
 4. 喬木第二小学校・下塚遺跡
 5. 市場遺跡
 6. 境田遺跡
 7. 小平遺跡
 8. 日向遺跡
 9. 立屋敷遺跡
 10. 広町遺跡
 11. 富田薬址
- A 市場古墳 B 地神古墳 C 馬場古墳 D 小平1・2・3号古墳 E 丸山古墳

の富田沢の南側には小平・馬場遺跡があり、弥生後期から古墳・平安時代にかけての遺物が表採されている。上富田にはいて番木第二小学校・下塚・市場遺跡と続くが同一扇状地に立地し、縄文中期後半・後期、弥生中・後期、古墳時代の遺物が表採されており、土偶片・石剣の出土もみている。

古墳をみると、番木村には電東地区唯一の前方後円墳郭1号墳が天竜川沖積上位段丘端にあり、番木村西部下段面には16基、洪積段丘と崖腹に21基の計37基の古墳の存在が知られており、大原段丘北西端部には奴山古墳群がある。富田地区には丸山古墳、小平1・2・3号墳、馬場古墳、市場古墳と発掘調査地に接して地神古墳がある。市場古墳が墳丘を残すが他は消滅し、墳丘の跡を僅かに残すのみとなっている。孤立した小盆地に7基の古墳の存在は遺跡の立地からみて重視される。

富田地区に隣接する飯田市上久堅には3基の古墳が存在するのみと対比される。

遺跡の北東の丘陵裾には富田窯址がある。飯田市下久堅大原の富田窯址とともに江戸時代後半に位置づくもので、製品からみて同一人、または同一族の窯址とみられる。中世における電東地域を支配した知久氏は、中世動乱期にはいてその本拠を知久平から上久堅の神ノ峯城へと移している。居住地とされる粕原に隣接する富田は重要な地点であったとみられる。知久氏の支城富田城跡は遺跡の西の丘陵にあり、富田地区の各遺跡にみられる中世陶片は注意すべきものである。

II 発掘調査経過

昭和55年度番木村農業構造改善事業は富田地区地神地籍を中心に行なわれることになった。ここには地神古墳が所在し、縄文時代、弥生時代の土器の表採されている遺跡であるため、工事着工前に番木村教育委員会は発掘調査を行ない、記録保存することになったのが本次調査である。

調査は、昭和55年7月21日より8月28日までの延28日間にもわたって行なわれた。この間盆休みがあり、前半は連日の炎天下の作業で苦労した。最初予定した古墳北側は氾濫堆積の深い階層で遺物の出土をみたが、遺構検出は2住居址にとどまった。西側の畑の調査が地主の理解で可能となり、遺構検出は多く、出土遺物も多量となった。また地神古墳外周の調査をなし、幅1mの小規模の周溝を検出した。

調査面積1,300㎡、調査区域の東側の一段高い畑には遺構なく、また北側にもなく、南西方向に集中し遺構は発見された。

発掘調査日誌

7月21日（晴、梅雨あけ猛暑となる。34.4°） 器材運搬、テント張り、草刈り。I調査区の1部にグリッド設定。調査にかかる。表土下20～30cmに水性ローム層あり、その下に砂層の暗褐色土がある。 〇地形測量

7月22日（晴、暑い。33.6°） I調査区a・c・e列調査。土器片多く出土するが遺構検出されず—80cmまで掘る。縄文中期・弥生後期・古墳時代の土器の混入出土をみる。埋立地ともみる。第II調査区の1部にグリッド設定。

7月23日（晴、午後僅にくもる暑い。） I調査区a・c・e列調査—100cmに弥生後期の遺構ともみるあるが不明。C1に古墳期とみる遺構あり。

- 7月24日 (雨) 作業不能
- 7月25日 (晴, くもり) 前日の雨のため調査グリッドは水びたし, 調査不能。Ⅱ調査区の調査。1号住居址検出, 大型の方形石組炉址あり。
- 7月26日 (くもり, 午後おそく雨) ブルーツァにより表土排除。1号住居址調査。Ⅰ調査区A列土層断面調査。
- 7月27日 (晴) 日曜日休み。
- 7月28日 (晴, くもり) Ⅱ調査区グリッド設定。北側より調査。1号住居址調査, 遺物多く, 砂層のためプラン検出に苦労する。
- 7月29日 (くもり) 1号住居址大型の隅丸方形となり縄文中期後半の住居址とわかる。2号住居址検出。Ⅱ調査区全面排土作業。
- 7月30日 (くもり, 午後雨) 1号住居址完掘・測量。2号住居址調査(弥生後期), 掘上げ, 測量。3号住居址の検出, 調査。4号住居址検出, 調査。
- 7月31日 (晴, 暑い) 1号・2号住居址写真撮影。3号住居址調査。北の1部のみで用地外となり, 掘上げ。(弥生後期) 4号・5号・6号住居址検出, 調査。
- 8月1日 (晴, くもり) 4号・5号・6号住居址調査, 4住の床面を切る大柱穴の並ぶを検出する。4号(五領期), 5号(弥生後期)住居址完掘, 測量。ブルーツァで残り部と盛土の排除。
- 8月2日 (晴) 6号住居址(弥生後期)完掘, 測量。ブルーツァ排土後の調査, 7号住居址検出。4号住居址内部掘込みの大柱穴列の調査, 1部用地外となり, 地主の許可を得て, 拡張調査, 奈良時代とみる建物址となる。
- 8月3日 (雨) 日曜日休み。
- 8月4日 (晴, 午後4時ごろより豪雨) 7号住居址(弥生後期)完掘, 写真撮影。建物址完掘, 写真撮影。8号住居址住居址検出。
- 8月5日 (晴, 暑い) 前日の豪雨で遺構内は泥で埋まり, 泥出し作業。7号住居址・建物址Ⅰの測量。9号住居址を検出。
- 8月6日 (晴) 9号住居址調査, 床面に達し遺物多し, 縄文中期後半。土偶の出土をみ, 埋壘を検出。5号住居址の下に弥生後期の埋壘炉を検出, 12号住居址となる。8号住居址の調査, 礫層に掘りこまれ苦労する。10号住居址検出, 完掘。(弥生後期)上層より鉄製紡錘車出土をみる。上層は新しい住居址の存在が考えられるが砂層のため掘りこみ誤りを犯したとみる。11号住居址検出。
- 8月7日 (晴) 11号住居址調査, 掘上げ(弥生後期)。9号住居址測量。10号・8号住居址測量。12号・13号住居址調査。全遺構写真撮影。
- 8月8日 (晴) 12号・13号住居址調査掘上げ, 測量(ともに弥生後期)。9号住居址炉址調査, 底部に完形土器をおき, 周囲に土器片を張る。12号・7号住居址の炉壘調査。Ⅱ調査区の北西隅に伏壘あり, 調査; 胴部は耕作により削採られたとみる。1号住居址南側の配石調査。
- 8月9日 (晴) 1号住居址石組調査, 鉄器出土, 1号土坑となる。9号住居址埋壘調査, とり上げ。1住の南側下層に14号住居址を検出, 埋壘をもち, 小形円形となる。完掘測量。土坑2号検出, 掘上げ, 測量。15号住居址を検出。
- 8月10日 (晴) 日曜日休み。
- 8月11日 (晴, 暑い) 土坑3・4号検出, 掘上げ。14号住居址埋壘調査, とり上げ。
- 8月12日 (晴) 土坑3・4号測量。9号住居址炉址内部をめぐる土器片調査, 3~5重に土器を重ね

て張り付ける。15号住居址(平安)を検出。

8月13日～17日まで盆休とする。

8月18日(くもり、雨) 16号住居址検出調査、完掘(縄文中期)。15号住居址掘上げ。I調査区上段の畑にグリッド設定調査、砂礫層となり遺構なし。

8月19日(くもり、時々晴) 15号・16号住居址写真撮影。10号住居址の東にカマド検出、19号住居址とする。17号・18号住居址検出調査。

8月20日・21日(雨) 作業不能。

8月22日(くもり、午前中雨となる) 15号・16号住居址測量。17号・18号調査。I調査区上段面遺構なく調査打切る。

8月23日(朝、雨、はれる) 17号(中世)、18号(古墳時代)住居址完掘。19号住居址完掘、測量(真間期)。20号住居址検出(平安)。

8月24日(晴) 日曜日休み。

8月25日(晴) 20号住居址完掘測量。地神古墳北端部の周溝検出、円墳とみられる。17号・18号住居址写真撮影。

午後、テント・器材撤収

8月26日(雨)

8月27日(朝雨、晴) 遺構分布測量。現場作業を終える。

雨で作業不能日は遺物整理をなし、その後他地域の発掘作業が続き、57年度にはいって報告書作成にとりかかった次第である。

Ⅲ 発掘調査結果

(I) 遺構・遺物

昭和55年度地神遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。(図4)

住居址 20軒……縄文時代中期中葉2・中期後半3、弥生時代後期9、古墳時代3、平安時代2、中世1。

建物址 1軒

土坑 5基

1. 住居址

(1) 縄文時代中期中葉

8号住居址(図5)

地神古墳の北西にあり、両側の1部は荒れており、調査不能であった。径5m余の不整形な円形をなし、

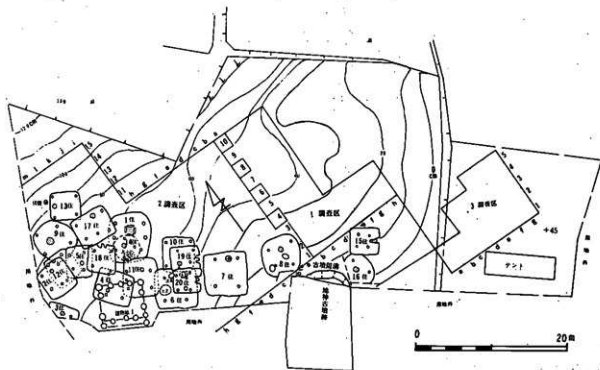


図4 地神遺跡調査区内遺構分布図

砂層に10~15cm掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は中心より北に片寄っており、地床炉である。炉址の南と東側柱穴に接して貯蔵穴とみられる大きな深い掘りこみがある。

遺物(図26) 土器は平出Ⅲ類Aの深鉢を主体とする。10は上層出土で口唇に刻みを施し、無文の鉢で、弥生中期の土器とみられる。石器には磨石斧1、打石斧2、横刃形石器1と石匙1の出土をみており、土製品には土偶脚部(図46の2)1こがある。

16号住居址(図6)

地神古墳の北東にあり、2

分の1は用地外と荒れのため調査不能。推定径4.5m前後の円形をなし、壁の大半は削りとられており、残った所よりみて、浅く砂層に掘りこむ堅穴住居址である。床面は砂礫層となり堅い。主柱穴2こが発見

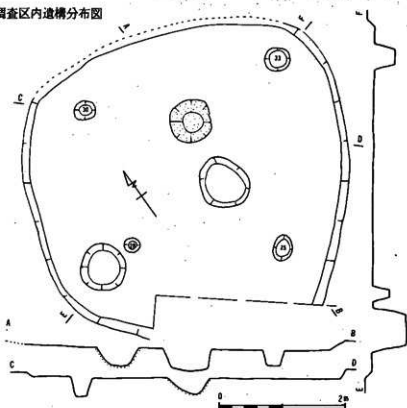


図5 地神8号住居址

されているが、その配置からみて4ことみられる。炉址は中心より北に寄っており、円形の地床炉である。

遺物(図27の1~13) 土器は平出Ⅲ類Aを主体とするもので出土量は少ない。石器には打石斧2、横刃形石器1と大形石鏝2があり、古墳北側より石鏝2と石鏝1(図46の7~9)の出土をみており、本址につくものとみられる。

(2) 縄文時代中期後半

1号住居址(図7)

Ⅱ調査地区の中央北側にあり、西に17号・18号住居址の1部がのり、南2分の1の下に14号住居址があって、その上に構築されている。南北径6.5m、東西径5mの隅丸方形をなし、砂層に20~30cm掘りこむ堅穴住居址である。砂層と周囲に複合する住居址があってプラン検出に苦労した。床面は堅く、南側に小礫集石の土坑1号が後に掘りこまれている。主柱穴は東西の壁に沿って3こずつの6こが配置されている。炉址は中心より北に片寄っており、1辺が1m余の石囲炉で深さ50cm、底部には土器片を敷くが、作業終了後に荒らされ測量不能となった。

遺物(図28・29・30・35の1・2)は多く、土器は下伊那地方縄文中期後半Ⅲ期に位置つくものである。図29の9は結節縄文をもつもので8の底部と北壁に付いて伴出し、本址のものか不明である。石器の量も多く、打石斧6、磨石斧刃部を欠くが2、横刃形石器17、凹石・磨石各1、石鏝2こがあり、図35の1・2の石皿と石棒とみる破片1この出土をみている。

9号住居址(図8)

調査区域西の用地外に隣接しており、南北径5.15m、東西5.6mの円形、砂層に10~15cm掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は5ことみられ、南壁に沿って部分的に2か所周溝がある。炉址は中心より西に寄っており、径1m余の円形、深さ55cmのスリ鉢状の掘りこみで、砂の崩れを防ぐため、まわりに土器片を3・4重に張り重ね、底に浅鉢(図33の1)を据えた類例の少ないものである。また南壁について埋壺(図31の1)が埋められていた。

遺物(図31・32・33・46の1・3~5) 土器は多く、下伊那地方縄文中期後半Ⅲ期の深鉢を主体にし、

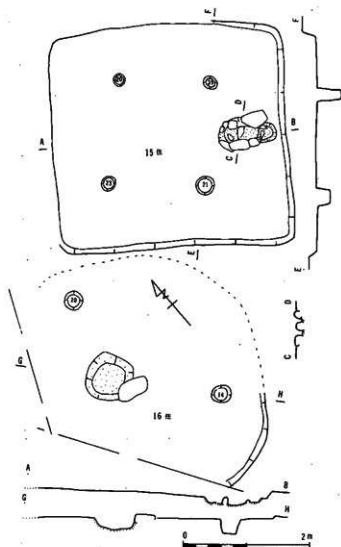


図6 地神15号・16号住居址

浅鉢2この出土もみている。石器は床面・炉址出土は僅かで、覆土出土が大半を占めるがこの期の石器量としては少ない。磨石斧刃部欠く1、打石斧6、横刃形石器4、磨石1と床面出土石鏝2と上層出土の石鏝1がある。

土製品に頭部を欠くが土偶(図46の1)1こ体が南壁近くの床面より出土している。頭部を除く体長29.4cm、左手と脚部先端を欠くが整った土偶である。

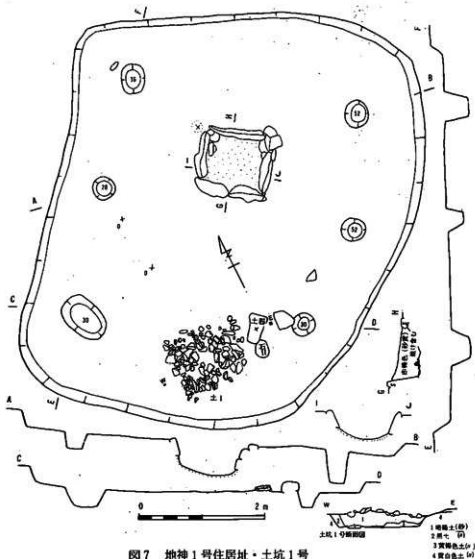


図7 地神1号住居址・土坑1号

14号住居址(図9)

1号住居址の南2分の1の下層にあり、土坑1号の調査によって発見された。径南北3.5m、東西3.25mの円形、砂層に35cm前後掘りこむ小形の壑穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4つ、炉址は中心よりやや北西に寄っており、地床炉である。南壁より45cm入って埋甕があり、底部を欠く無文の鉢(図34の1)である。

遺物(図34・図46の6)は少なく、土器は埋甕以外に破片6点のみ、中期後半Ⅲ期とみられる。石器には打石斧1、横刃形石器2、磨石1と基部を欠く石匙1ある。

本址は上部の9号址との深さ5cmの差があり、本址を埋めた上に9号住居址が建替えられたものと考えられる。

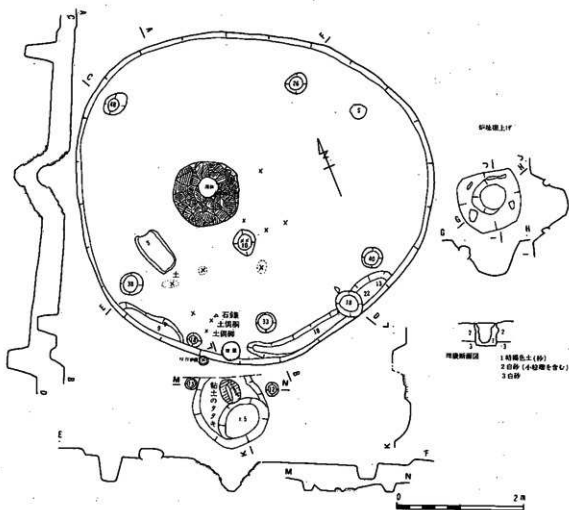


図8 地神9号住居址・土坑5号

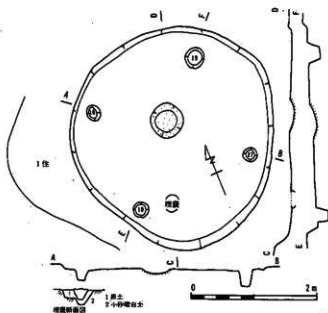


図9 地神14号住居址(1:20)

(3) 弥生時代後期

2号住居址(図10)

9号住居址の南に接し、東に5号住居址と僅かに重なり、12号住居址の上に東半分はのる。南北4.1m×東西4.3mの隅丸方形をなし砂層に20～30cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は張り床となり、主柱穴4こが整った配置にある。炉址は北側柱穴の中央部にあり、浅い地床炉であり、砂層のため焼土は僅かにみられ、内部には灰が充滿している。その西側に径20cm程の焼土のマウンドがある。南壁中央部に出入口をなす掘りこみがつ

く。

遺物(図36) 土器は多く、座光寺原式を主体とする。1は菊川式の壺の口縁部、2は座光寺原式の壺口縁部片、3・4は壺底部である。5は台付壺、11の台付脚部を除き壺形土器である。く字状のカーブをもつ口縁部と櫛描波状文と斜行短線文の組合せ、特に細かい波状文(7・9)、不規則な波状文(5・6・8・10)は座光寺原式の典型的な器形と文様構成をなすものである。

石器には16の小形石剣とみるもの、17・18の有肩扇状形石器と19の砥石は表裏に凹みもち、表面と側面に砥石の使用痕は顕著であり、砂岩製である。

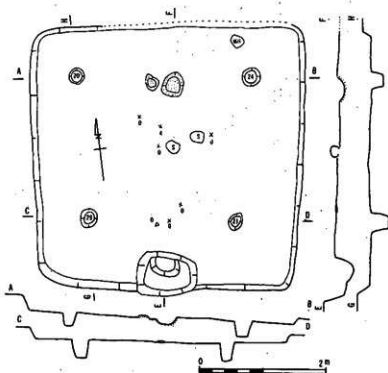


図10 地神2号住居址

3号住居址(図11)

南は用地外のため、北側3分の1以下の調査に終わる。東西辺4.15mの隅丸方形、砂層に25~30cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は1こ検出されているが、その配置からみて4ことみられる。炉址は北側柱穴間の中央部にある地床炉である。

遺物(図37の1) 土器は座光寺原式の壺・壺・台付壺片と11の手づくね土器がある。石器には12の打製石庖丁と13の大形横刃形石器の出土をみている。14は上層出土の古墳時代の土師器碗である。

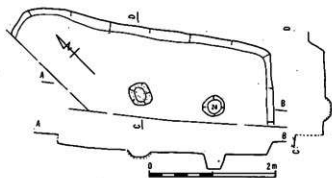


図11 地神3号住居址

5号住居址(図12)

9号住居址の南の1部に、また12号住居址の東の3分の1にのり、2号住居址の東側の張床の下にあり、東は18号住居址、北は17号住居址が上にある重複した住居址である。南北4m×東西3.7mの隅丸方形、20~30cm砂層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こで南西には支柱穴がつく。炉址は中心よりやや南東に寄っており、地床炉である。

遺物(図37のⅡ)は少なく、土器は2号住居の混入もみられる。座光寺原式の古い要素をもつものが多い。石器には打製石庖丁(8)と扇状形石器(9)の出土をみている。

6号住居址(図13)

調査区のはぼ中央部にあり、西は11号住居址と僅かにふれあい、東は20号住居址がのり、北は10号・19号住居址の1部がのる。南北5.1m×東西5.5m、砂層に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴4こが整った配置にある。炉址は東側柱穴間の中央部にあり、地床炉である。

遺物(図38・図46の13~15)土器片の出土量は多く、壺・甕・台付壺・高杯があり、座光寺原式の古い要素をもつものである。図38の1は静岡県産の菊川式の壺で胴下半部を欠く。頸部はへら磨き、

頸部下を5こを組にした円形付文がめぐり、胴上半分を3条の結節文をめぐらし、その間をRLL, LRR, LRRの縄文で飾り、胴下部は刷毛目整形を施す。胎土は雲母・小石粒・砂粒を含み、焼成良好、淡褐色から黒褐色を呈す。内面は剥落が著しい。当地方では初見のものである。

2~13は座光寺原式の壺で、いずれも頸部を欠き、肩部文様は波状文と斜行短線文の組合せが主体となり、4分の1円弧文が付くもの波状文のみがあり、刷毛目痕をもつが多い。

甕はくの字状に外支する口縁をなし、文様は波状文と斜行短線文の組合せが主体をなすが、斜行短線文のみの15、斜行する沈線を施19等があり、古い要素をもつものである。台付壺の脚部に30~33があり、30は刷毛目痕が顕著にみられる。高杯29の杯部は直線的に外反し、底部を欠くが稜をもつとみられる。

石器には38の有肩扇状形石器と39の抉りをもたぬ打製石庖丁がある。土製品に図46の13~15の手づくねミニチュア土器の出土をみている。

7号住居址(図14)

6号住居址の東に単独にあり、南北5.7m×東西5.55mの隅丸方形、砂層へ10~15cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、整った配置にある。3この柱穴は二重となり、建替のなされた住居址ともみられる。炉址は北側柱穴間の中央より東にやや寄っており、埋燵炉である。

遺物(図37のⅢ)は少なく石器の出土はない。壺・甕・台付壺・高杯がある。2は炉壺、1は床面出土の甕である。3の高杯の杯部はくの字状に大きく外反する口縁をなし、胴中部に稜をもつ。他は小片である。いずれも座光寺原式である。

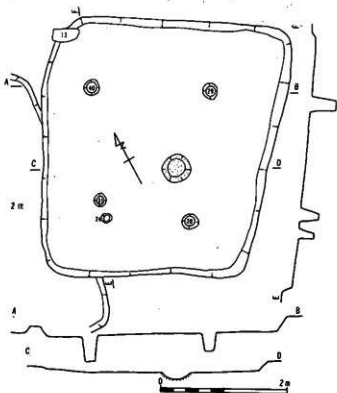


図12 地埦5号住居址

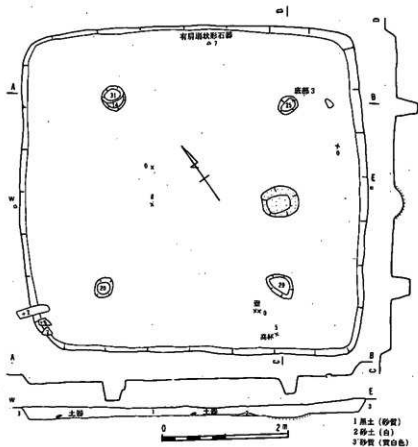


図13 地神6号住居址

中島式後半の無文の甕、高杯の杯部と五領期の有段の甕口縁部の出土をみている。古い古墳時代の住居址ともみられる。

11号住居址 (図16)

東は6号住居址の下に1部はかかり、西の1部は4号住居址の下になり、また建物址Iの掘立柱が南4分の1に掘りこまれている。北の1部は1号住居址の上になる重複した状態にある。南北4.85m×東西4.3mの隅丸方形、砂層に20~25cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は北側の柱穴間の中央よりやや東に寄っており、地床炉である。東壁に沿って大きな柱穴4こ、この間をつなぐ幅30~40cm、深さ15~25cmの溝が付く施設があり、建物址Iに関連するものともみられたが、出土遺物は弥生後期であり、その性格は不明であった。

遺物(図39のI)は少なく、座光寺原式の壺と甕の土器片と、石器には12の小形石鎌と11の磨石鎌の未製品がある。

12号住居址 (図17)

2号・5号住居址の下にあり、9号住居址の調査によって炉址が発見され、その存在を認めたものである。南北4.5m×東西3.9mの隅丸方形、砂層へ20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は北側柱穴間の中央にあり埋甕炉である。

10号住居址

(図15)

7号住居址の西1mにあり、南の1部は6号住居址の上になっており、また19号住居址と20号住居址の1部がって構築されている。南北4.5m×東西4.4mの隅丸方形をなし、砂層に15~20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は南側柱穴間の中央にあり、円形の地床炉である。遺物(図37のIV)

は少なく、床面より座光寺原式土器の僅かと覆土より

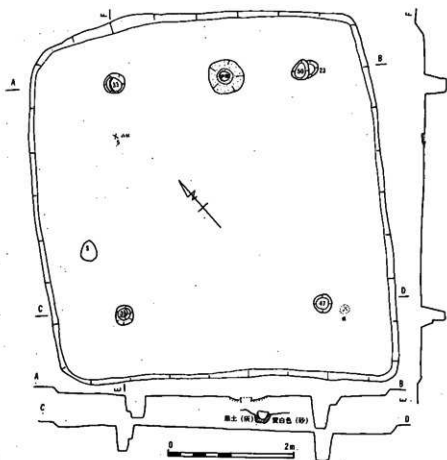


図14 地神7号住居址

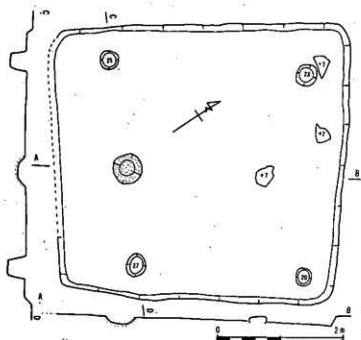


図15 地神10号住居址

遺物(図39のⅡ)は少なく、
 炉壁以外は台付
 甕の脚部と壺の
 底部の出土をみ
 たのみであり、
 座光寺原式であ
 る。

13号住居址

(図18)

9号・17号住
 居址の北にあり
 調査区の北端に
 ある。南北4.1
 m×東西4mの
 隅丸方形で北・
 西・南の壁は1
 部を残すのみで
 削られており、
 残る壁でみると
 砂層に25cmの深
 さに掘りこむ壁

穴住居址である。床面は堅く、
 主柱穴は4こ、炉址は西側柱間
 の中央にあり地床炉である。

遺物(図39のⅢ)は少なく、1
 の壺は頸部の1部と肩部から胴部
 を残し、胴部は球状となる。頸部
 に櫛描横線文と肩部に波状文を施
 す中島式後半にみる文様構成であ
 るが、本道跡座光寺原式住居址例
 には、この手法が多くみられ座光
 寺原式とみたい。2は1と同じ文
 様の壺片、3は斜行短線文を残す
 のみの壺片であり、4は手づね
 土器の底部である。

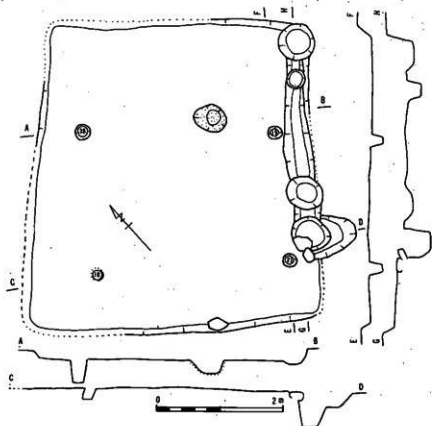


図16 地神11号住居址

(4) 古墳時代

4号住居址 (図19)

東の1部は11号住居址の上のり、北の1部には18号住居址がほぼ同一面で重なり、また、床面に掘りこむ建物址Iの掘立柱の掘りこみが並ぶ。南北4.35m×東西4.1mの隅丸方形、砂層へ15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、支柱は4こ、炉は地床炉で、掘りこみは深く、北側柱穴間の中央より西に片寄ってある。北西柱穴と炉南側にわたって長さ80cm余の炭化木が横たわっている。

遺物(図41のI) 古墳時代前期の土師器で壺、碗、器台台部、台付壺脚部と鉄鉢の出土をみている。1の壺は頸部はしまって口辺部は強く外反し、口端近くに緩い段をめぐらし、胴部は球状をなし、刷毛目状の細かい擦痕を残す。3は口辺部を欠くが、頸部からく

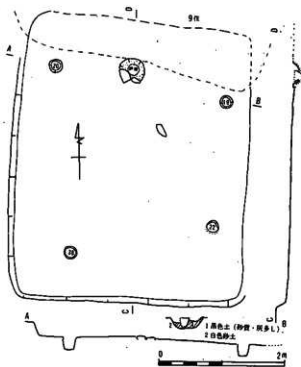


図17 地神12号住居址

の字状に外反するとみられ、胴部は扁平な球状をなし平滑で底部近くに細かい刷毛目痕がみられる。3の椀形土器は高さ8cm、口辺部は直線的に外反し、底部は艶削り、内面は横なで、外面は刷毛目痕が著しい、五傾式後半に位置づく土器とみたい。

18号住居址 (図20)

1号・4号・5号・17号住居址の1端にふれあい、これらの中にはさまれた状態にある。1号・4号・5号住居址の調査が先行し砂層のためカマドの検出によってその存在を確かめたため、壁を削りとった誤りを犯したものである。南北3.8m×東西4.2mとみる隅丸方形の砂層に15cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4、北東壁中央にカマドがつき、支脚を残す。また住居の中心より南に片寄って大きな隅丸方形の浅い掘りこみがあり、

焼土と灰の堆積をもつ。その南より鉄剣の出土をみている。

遺物(図41のⅢ、46の16)土師器・須恵器・砥石・鉄剣がある。土師器の壺2は外面黒色、艶磨で長胴になるとみる。3の杯は内面黒色、口辺部がくの字状に外反する。3・4ともに丸底であり、5は甌の上向き把手、6の須恵器の鉢は胎土が良いが生焼である。

砥石の7は小形砥石、細かい条線が2面に施され、8は半円状の面をもち、交叉する5条の沈線と8条の斜沈線をもつものであり、9は2面に使用面があり、1面に2条の沈線を引くもので、ともにその使用は不明であり、いずれも砂岩製である。

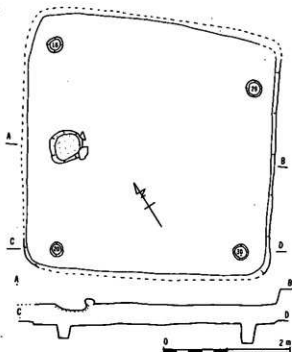


図18 地神13号住居址

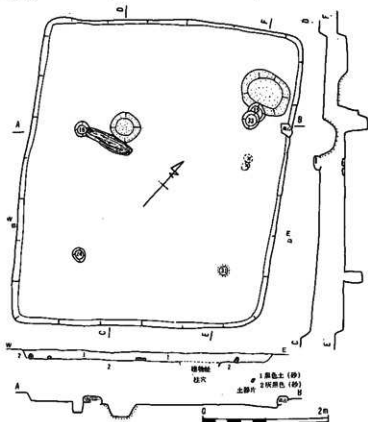


図19 地神4号住居址

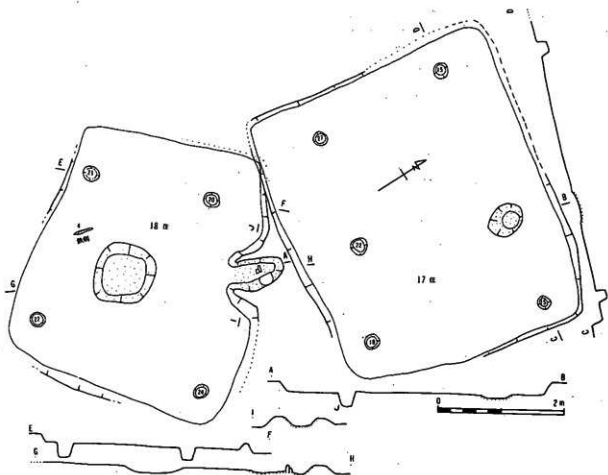


図20 地神17号・18号住居址

鉄剣(図46の16)は推定全長28cm位茎の長さ5cm最大身幅3cm、錆をもち、断面は扁平の菱形を呈す。18号住居址は遺物からみて古墳時代最終末期から歴史時代にはいる時期とみられる。

19号住居址(図21)

10号・6号住居址に重なり、これら住居址調査を先行し砂層のため東壁を除き壁を削りとった誤を犯した。10号住居址と床面はほぼ同レベルにあり、カマドの発見により、その存在を確かめたものである。南北3.6m×東西4mの隅丸方形をなし、砂層に15cm前後掘りこむ壁穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4つ、東壁中央部にカマドが付き、その前面に灰溜とみる焼土と灰の堆積をもつ掘りこみがあり、カマド北側に浅い掘りこみがつく。

遺物(図41のII・図46の17) 土器には土師器と須恵器がある。土師器1の甕は頸部はしまっていくの字状に口辺部は強く外反する。杯には2~6があり、2は完形、丸底、口辺部内面に稜をもち、外面底部と内面に木筒状具による擦痕をもつ。4は内外面とも黒色、3・5は内面黒色、3は内面を筒磨きで研磨され、擦痕が暗文状となる。須恵器7は甕片で、細かい波状文をめぐらし、胎土焼成良好。8・9は菱形で胎土は良い。図46の17の鉄製紡錘車はカマド焚口の5cm上層より出土し、錆の付着は著しく、完形に近いものである。図示以外に土師器、須恵器片、鉄鏃の出土をみている。

(5) 平安時代

15号住居址 (図6)

本次調査で東端に発見された住居址で、16号住居址の北に隣接し、北から西にかけては荒れており、壁は削りとられている。南北3.5m×東西3.8mの隅丸方形、砂礫層に15~20cm掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4こ。東壁中央より僅か入って石組カマドがあり、支脚を残す。

遺物(図42の1~4)は少なく、須恵器には1の甕の口縁部、2の蓋杯の蓋部があり、地方産である。3・4回は国分式の土師器壘片、図示以外に小片数点がある。

北から西にかけての荒れは弥生後期・古墳時代の遺物(図40)の出土をみており、これら時期の遺構の存在したことが予想される。

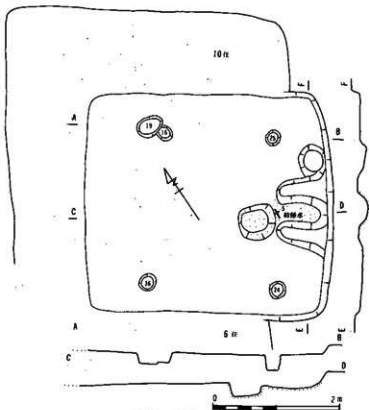


図21 地神19号住居址

20号住居址 (図22)

6号住居址に重なり、19号住居址の1部とも重なる。6号住居址の調査が先行したため、同レベルにあり、砂層のため東壁を除き削り取った誤りを犯した。カマドの発見により住居址の存在を確認したものである。南北3m×東西4mの隅丸方形、砂層に10cm余掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4こ整った配置にある。東壁中央部にカマドが付き、支脚を残す。

遺物(図41の5~16) 土師器、須恵器、灰釉陶器がある。土師器(5~11)は国分式の甕である。5は最大径は肩部にあり、帯状にくびれた頸部をなし、肩部より口縁部にかけてコの字状を呈す。8~10は櫛状具により胴上部は縦・斜の、底部は横位のかき目を施すこの期の一般的にみられるものであり、11の底内部は黒

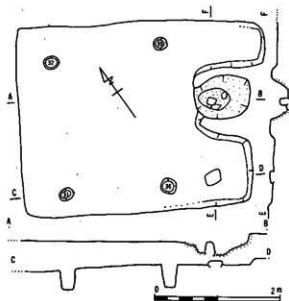


図22 地神20号住居址

色である。12・13は須恵器の杯, 14~16は灰釉陶器碗で東濃産である。

(6) 中 世

17号住居址 (図20)

18号住居址の北に隣接し, 1号・5号址に僅かに接しあっている。南北4.2m×東西4.85mの隅丸方形をなし, 砂層に15~20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く支柱穴は北側に2こ, 南側に3こが並ぶ。浅い掘りこみの地床炉が北側柱穴間の東に片寄っており, その形態からみてヘツツイを置いたものともみられる。

遺物(図43)1~3は志野皿で, 1は菊花文が付く。4・7は内耳土器, 5は鉄釉の碗の底部, 6はス

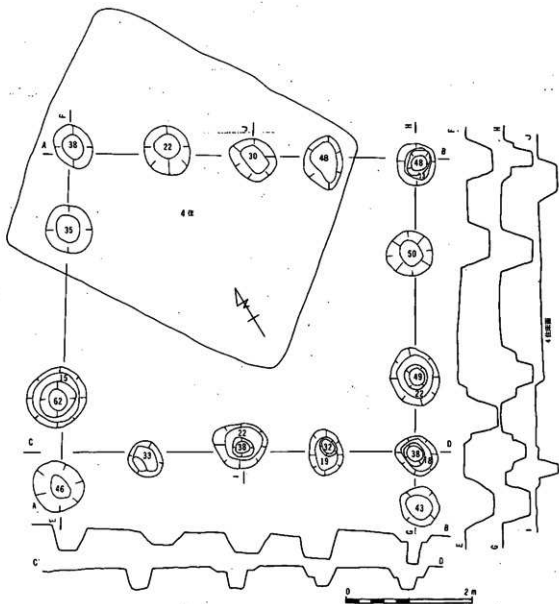


図23 地神建物址1号

り鉢片で目の磨滅は著しい。図示外に小陶片数点があり、本址以外の上層より中世陶片の出土をみており、用地外南の畑にも表採され、中世末の遺構の存在が予想される。

2 建物址

掘立柱建物址 I (図 23)

北は 4 号・11 号住居址の上のり、南は用地外にかかり、地主の許可で調査したものである。柱穴の中心で $5.5 \text{ m} \times 5.5 \text{ m}$ の正方形の範囲に建てられた掘立柱建物址である。しかし南の両端にある柱穴からみると、さらに用地外に建物址はのびているものとみられる。

遺物(図 44・図 46 の 18~20) 土器(図 44)には土師器、須恵器がある。土師器(1~7)の 4 は小形甕とみられ、1・7 は碗、2・5・6 は高杯、3 は杯で口辺部は小さく外反し、胴部は張る。4・7 を除き内面黒色である。須恵器(8~14) 8・12 は杯、8 の底部は髄削り、12 は糸切底。13 は蓋杯の身、10 は長頸壺とみられ地方産である。甕片の 11 は地方産、14 は美濃須術産である。

鉄器(図 46 の 18~20) 18 は刀子、断面は二等辺三角形をなす。19 は小札とみることが不明、20 は馬具とみられるが錆の付着が著しい。

遺物からみて土師器は晩期前半であり、8 世紀頃に位置づく建物址とみたい。

3 土 坑

土坑 1 号(図 7)

1 号住居址内の南側床面に接し、1 辺が 1 m 余の方形に礫を敷き、その下に 25 cm 前後砂層に掘りこむ土坑である。遺物(図 45 の 1~3) は中世後半の陶器片で 1 は鉄軸の鉢、2 はスリ鉢、3 は鉄軸の天目茶碗底部であり、図示外に小陶片と鉄片の出土をみている。

土坑 2 号(図 24)

6 号住居址の中に掘りこまれ、 $1.5 \text{ m} \times 1.3 \text{ m}$ の楕円形、砂層に 40~50 cm 掘りこむ土坑である。遺物(図 45 の 4~8) 土器は縄文中期後半 V 期の結節縄文をもつ土器であり、石器に 8 の石匙の出土をみている。本土坑の南西に炉址とみることが発見されているが、上部は削りとられており、住居址の存在も考えられるが不明であり、結節縄文をもつ土器の小片がみられた。

土坑 3 号(図 24)

2 号土坑の東 2 m にあり、 $0.7 \text{ m} \times 0.9 \text{ m}$ の楕円形、砂層に 35 cm 掘りこむ土坑である。遺物(図 45~13) 土器は縄文中期後半 III 期の破片と石鏃 1 本の出土をみている。

土坑 4 号(図 24)

土坑 2 号・3 号の間であり、長さ 1.2 m、2 本の 20 cm と 35 cm の掘りこみよりなり、遺物の出土はない。

土坑 5 号(図 8)

1 号住居址の南、12 号住居址の下にあり、東西径 1.15 m、南北推定径 1.2 m の円形、25 cm 前後砂層に掘りこまれ、中心よりやや北に楕円形の粘土のタタキをもつ、また東西の壁に沿って各 1 本の小柱穴がつ

く。遺物は図示しないが縄文中期終末期の土器小片数点の出土をみている。

4. 地神古墳北周溝 (図25)

下伊那史三巻には「……字地神に東南8.8m、11.3mの後面は背垣で他の三面に石をめぐらした草生地あり、奥まった所に「地の神」の小祠をおき、その前に数株の松・桜・梅の木が茂る。祠のうしろにある高さ1mほどの小隆起は地神古墳の痕跡である。かつてここから鉄鍬と土師器を掘り出したことがあり……」と記載されている。今次調査は石垣北側5.5mについて行った。上部は削られ、原形は不明であるが、残る部分では幅1m前後、深さ50cm前後の周溝が弧をもつてめぐることが確かめられた。この周溝からみると径8m余の円墳であり、畑にある石・地主の庭に据えられた沓脱石は横穴石室の天井石とみられるもので、横穴石室をもった古墳であり、周辺の遺物からみると後期後半に位置づく古墳であったとみる。

5. 遺構外の遺物

(図27の14、図35の3~14)

図27の14の伏罨が13号住居址の西に接して出土している。出土地点は遺跡の北端となり、傾斜が強くなる所で、耕土直下に口縁部を残すのみとなっていた。おそらく住居址の南側にあったものとみられるが、伏罨の口縁部を残し削りとられたものと考えられる。縄文中期後半Ⅲ期の深鉢で、口径31cm、頸部はあまりしづまなくて胴部にいくとみられる。口縁帯を楕円文がめぐり、その内部を沈線・縄文・刺突文により一つ一つの楕円文内を異なる文様で飾る類例の希なものである。

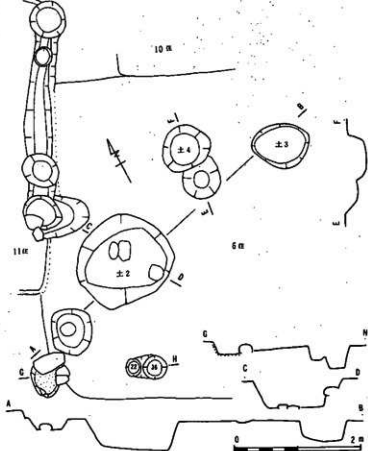


図24 地神土坑2号・3号・4号

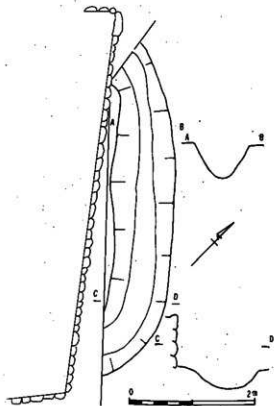


図25 地神古墳北周溝の1部

図35の3～14は古墳のまわりの石積の中と周辺表採の石器・土器片である。石器は磨石斧・打石斧・石鏝・小形石皿があり、石剣片(11)とみるがある。土器は13の縄文中期中葉初頭とみるもの、14の縄文中期終末期のものがある。グリッド調査により発見されたものに図46の7～9の石鏝・石碓がある。

図47の土器片は、1号・9号・2号・5号・6号・11号住居址上層と周辺出土の土器であり、1～4は爪形文をもつ縄文中期初頭の土器であり、5・6は縄文中期後半Ⅲ期前半とみられる。

7～33は縄文中期最終末期の下伊那地方中期後半Ⅳ・Ⅴ期の土器である。7・9・19・21はⅣ期、他の2組の結節縄文のさがる1群はⅤ期であり、これら時期の遺構の存在が予想され、弥生後期以後の遺構によって崩されたものと思われる。6号住居址南西端に発見された炉址は、この期のものと推測された。

(Ⅲ) 地神遺跡出土石器一覧表

(硬…硬砂岩、靱…靱灰岩、黒…黒曜石)

遺構	図番号	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	出土 点	備考	遺構	図番号	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	出土 点	備考	
8住	26	11	磨石斧	靱	15.2	3.5	465	上層	1住	30	7	横刃形石器	硬	8.6	7.8	135	北床	
		12	打石斧	硬	10.3	4.4	112	床		8	"	"	5.8	8.4	80	南壁		
		13	"	靱	10.2	4.6	120	"		9	"	"	4.8	8.7	45	床		
		14	横刃形石器	硬	5.5	9.1	75	"		10	石鏝	"	5.3	3.0	31	"		
		15	石鏝	?	5.4	4.2	21	"		11	"	"	4.3	4.4	60	西床		
16住	27	9	石鏝	硬	10.6	7.0	220	床	"	12	凹石	靱	8.3	4.8		床	半分を欠	
		10	"	"	9.6	7.4	280	上層	"	13	磨石	花	8.4	5.6		西床	"	
		11	打石斧	靱	8.0	4.2	60	床	"	14	横刃形石器	硬	4.7	6.3	28	覆土		
		12	"	"	10.2	3.8	100	"	使用痕	"	15	"	"	7.0	11.6	160	"	
		13	横刃形石器	"	6.3	12.2	180	覆土	"	16	"	靱	6.3	8.6	54	"		
1住	29	10	打石斧	硬	10.9	4.8	128	床	"	17	"	"	4.2	7.7	36	"		
		11	"	"	9.7	4.5	120	"	18	"	硬	4.9	6.8	35	"			
		12	"	"	10.1	4.3	92	"	19	"	"	5.2	7.0	50	"			
		13	"	"	8.8	4.1	63	西壁	"	20	"	"	6.1	7.7	76	上層		
		14	"	靱	8.3	4.0	54	床	"	21	"	"	5.5	7.3	54	"		
		15	"	"	8.2	3.2	46	北壁	"	22	"	"	5.9	9.5	113	"		
		16	磨石斧	"	7.6	3.2	68	"	万部欠け	23	磨器	"	7.6	8.0	160	"		
		30	1	"	輝綠岩	13.2	4.8	405	覆土	"	35	1	石皿	花	38.9	18.0		床
		2	横刃形石器	硬	8.0	9.7	197	床	"	9住	33	7	打石斧	硬	7.4	4.2	51	炉
		3	"	"	9.7	11.3	250	"	8		"	靱	7.3	4.2	30	"		
		4	"	"	8.0	12.0	220	南壁	9		磨石斧	"	5.0	3.2		床	万部欠け	
	5	"	"	5.2	7.8	50	床	10	横刃形石器		"	3.7	6.3	20	"			
	6	"	"	5.0	9.2	56	南壁	11	"		硬	4.8	8.4	90	"			

遺構	図番号	No	器 器 材 質	長さ cm	幅 cm	重さ g	出土点	備 考	遺構	図番号	No	器 器 材 質	長さ cm	幅 cm	重さ g	出土点	備 考		
9住	33	12	打石斧	縦	12.8	4.0	100	覆土	製面敲打痕	11住	39の1	12	石 鍬	硬	13.2	4.6	168	床	
	"	13	"	硬	10.7	4.7	116	"		4住	46	10	石 鍬	硬	9.2	5.0	120	上層	
	"	14	"	"	11.2	4.3	82	"		"	11	石 鍬	黒	1.3	0.8	"	"		
	"	15	"	"	10.5	4.8	126	"		"	12	"	"	1.9	0.9	"	北壁上		
	"	16	横刀形石器	"	9.0	12.6	240	"		18住	41の3	7	砥 石	砂岩	6.0	3.0	"	床	
	"	17	"	"	9.0	11.5	156	"		"	8	"	"	7.5	9.6	"	"		
	"	18	磨 石	砂岩	14.0	6.9	385	"		"	9	"	"	12.1	7.7	"	"		
	46	3	石 鍬	黒	2.4	1.2	"	床		上層2	45	8	石 匙	粘板岩	6.8	4.6	25	"	刀部欠け
	"	4	"	チャート	1.7	1.3	"	上層		"	9	石 鍬	硬	8.4	5.6	155	"	"	
	"	5	"	黒	1.5	0.9	"	床		古石層周辺	35	3	磨石斧	縦	14.0	5.2	420	"	刀部欠け
14住	34	8	打石斧	硬	8.4	4.4	85	床	基部を欠く	"	4	"	"	11.3	4.7	190	"	基部を欠く	
	"	9	横刀形石器	縦	5.9	9.5	62	"		"	5	"	"	10.0	4.8	275	"		
	"	10	"	硬	3.3	4.7	14	"		"	6	石 皿	花	14.0	10.0	"	"		
	"	11	磨石斧	花	6.9	5.5	190	"		"	7	石 鍬	硬	9.2	7.3	242	"		
	"	11	砥石	砂岩	16.9	17.2	"	床		"	8	"	"	9.4	6.7	195	"		
2住	36	16	石 鍬	硬	11.8	4.3	120	覆土	表裏に 筋を持つ	"	9	"	"	4.9	4.4	36	"	刀部を欠く	
	"	17	有肩伏形石器	"	7.2	10.7	146	床		"	10	"	"	4.4	2.8	17	"		
3住	37の1	12	打製石應丁	硬	4.1	6.0	25	北壁		"	11	石 剣 ?	?	9.8	2.9	75	"		
	"	13	横 刀	"	6.9	14.2	210	覆土		"	12	打石斧	"	13.1	4.1	158	"		
5住	37の2	8	打製石應丁	硬	4.5	6.9	44	北壁		"	46	7	石 鍬	黒	1.5	1.2	"		
	"	9	扇状形石器	硬	7.7	10.3	135	床		"	8	"	"	1.9	0.8	"			
6住	38	38	有肩扇形石器	硬	9.3	11.3	160	覆土		15住周辺	40	5	有肩扇状形石器	硬	9.0	8.9		145	"
	"	39	打製石應丁	"	3.8	8.5	40	"		"	6	"	"	10.1	10.4	250	"		
11住	39の1	11	磨石の未製品	縦 ?	6.9	3.3	18	床											

IV ま と め

地神遺跡の立地 遺跡のある下富田は、断層縦谷により形成された周囲を丘陵に囲まれた盆地地形にあり、比較的平均な地形をなし、南を富田沢が西流し、北は旧流路を示す低地帯をなし、水田地帯となっている。遺跡は氾濫堆積よりなる舌状扇状地の鞍部に立地し標高550～555mを測る。発掘地域の南を境に南北に緩い傾斜をもって下がっている。用地外の南面に遺物の散布は多く、北の低地帯と東の砂礫層地帯には遺物・遺構は発見されていない。発掘区域から南側から南西にかけての現在の下富田の集落を中心にして遺跡は広がっているとみられ、集落形成の好適な立地にある。

縄文時代をみると、中期中葉初頭に位置づくとみる住居址2軒が古墳の北に発見されており、さらに古墳周辺に集落の展開が予想される。出土土器は平出Ⅲ類Aを主体に、僅かに勝坂式を伴ない、石器の出土は少ない。

下伊那地方中期後半Ⅲ期の住居址1号・9号の規模は大であり、その炉址は1m余の方形石囲炉で底部に土器を敷く1号、径1m余の円形の内周に土器片を三重、四重と張りつけ底に浅鉢を据える9号があり、砂層の立地に即した炉址のあり方は注目される。

土器は頸部のしまりは少なく、口縁部の開きも少なく、胴部は僅かに中央部でふくらむ深鉢を主体とする。口縁部文様帯には隆帯による渦巻文によって区画され内部を縄文で飾る1群と、沈線による楕円文、円文で区画し、内部を沈線で飾る1群があり、これらが主体をなす。口縁部文様帯の直下に刺突文をめぐらせる例は1号址に多くみられるが、9号址にはない。体部文様は太い2条、3条の縦の沈線で区画し、地文の縄文を切るもの、沈線間をへら状具による沈線の綾杉文を施すが主体となり、9号址埋壘の細い条線による例は他にない。1号址には体部文様を隆帯による渦巻文モチーフを施す例がみられている。口縁部にブリッチ状に把手をめぐらす飾られた土器がみられ、9号址炉址底に据えられた浅鉢にも把手がめぐらされている。

下伊那地方の中期後半の洪積段丘上の遺跡よりの石器の出土量は多く、特に打石斧の多いのが特徴である。しかし、本遺跡においては石器出土量は少なく、打石斧に対し横刃形石器が多い。1号址では打石斧6こに対し横刃形石器17こで、その比は約1:3であり、9号址床面、炉址出土は2こで1:1である。やわらかい砂質土と石器の関連を考えたい。

中期後半Ⅳ・Ⅴ期の土器は土坑出土を除き多くが採集され、鞍部南の用地外で表採されており、この期の集落の存在が予想される。

弥生時代後期住居址9軒が調査されたが、重複がみられ、建替または時期差とも考えられるが、座光寺原式を主体とし、土器の差ははっきりしない。10号址覆土より中島式の新しい時期の壘と五領期の有段口縁の壘の出土をみ、この時期の住居址と思われるものがある。座光寺原式に伴って静岡県産の菊川式土器の出土をみており、下伊那地方初見のものであり、天竜川を溯上し、遠山の谷から伊那山脈を越えて搬入されたものとみたい。

古墳時代にはいはって五領式後半の4号址、10号址覆土出土の五領式の有段口縁の壘、さらに遺跡の南西端近くの家の池を掘った際出土した壘(図41の1の8)があり、この期の集落が用地外の南から西にか

けて展開されたものと受けとめられる。

古墳時代後期住居址は2軒調査され、この期の遺物は調査区内の採集、用地外の表採も多く、地神古墳をはじめ富田地区内に点在する古墳との関連がうかがわれる。

歴史時代になると奈良時代から平安時代前半とみる掘立柱建物址、平安時代後半の住居址があり、大集落が展開されたものと予想される。

さらに中世の住居址、土坑の存在、周辺にみられる中世陶器片等、富田城を支えた武士団の居住地であったとみられる。

肥沃な富田盆地の生産力が弥生後期から連続して集落を形成するにふさわしい立地条件にあり、伊那層の丘陵に囲まれた小盆地にある主要遺跡として重視したい。

本次発掘調査にあたって地主の御理解、協力があり、連日の炎天下にあつて作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったことを深謝したい。

(佐藤 勉 信)



图26 地神8号住居址出土遗物(1:4)

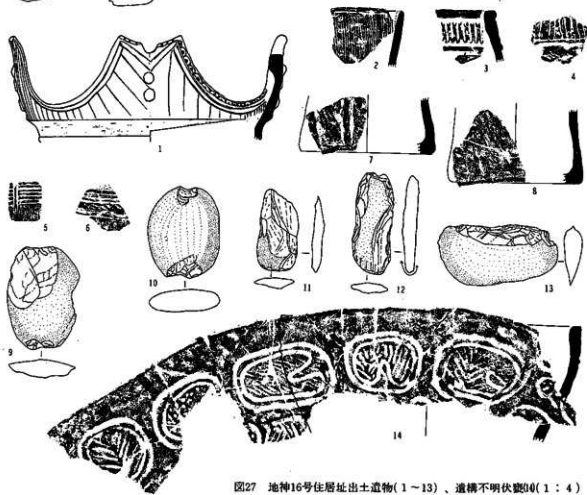


图27 地神16号住居址出土遗物(1~13)、遺構不明伏嬰00(1:4)

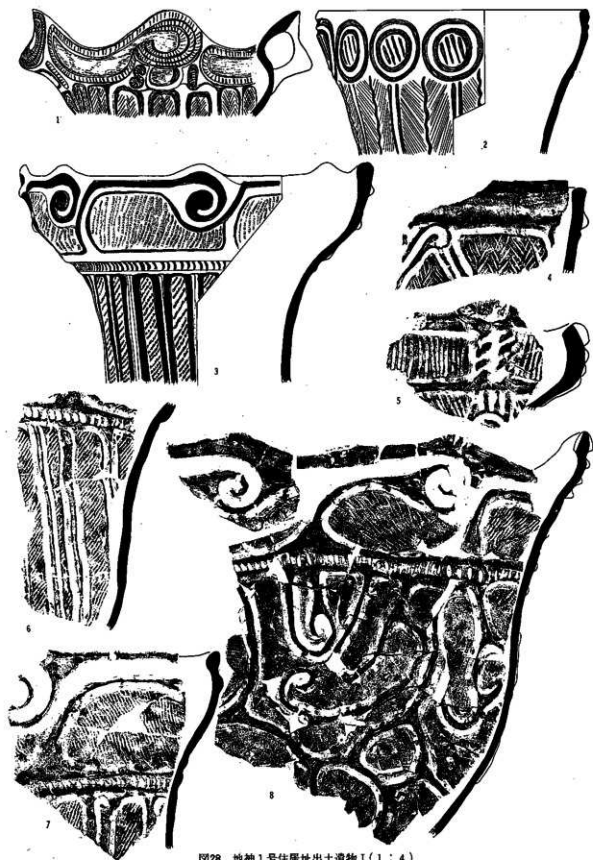


图28 地神1号住居址出土器物I(1:4)

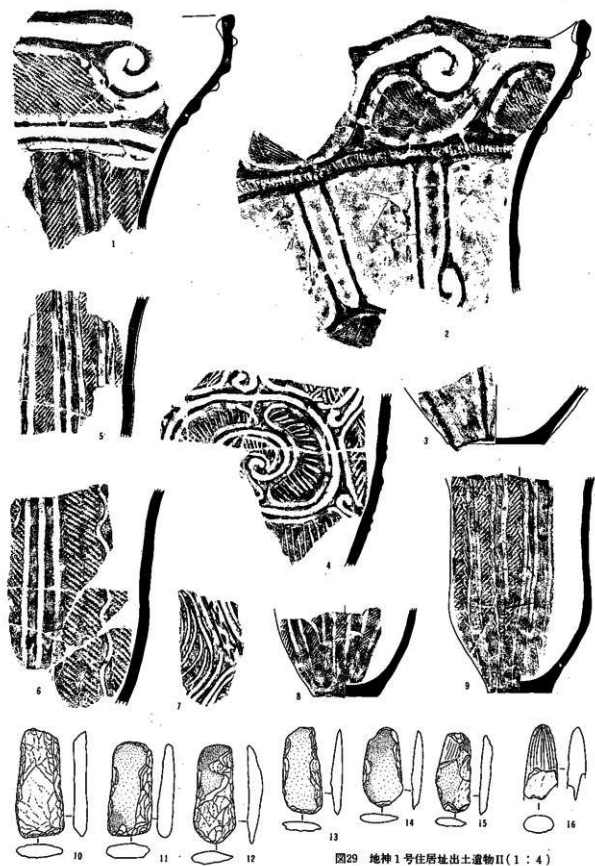


图29 地神1号住居址出土遗物II(1:4)

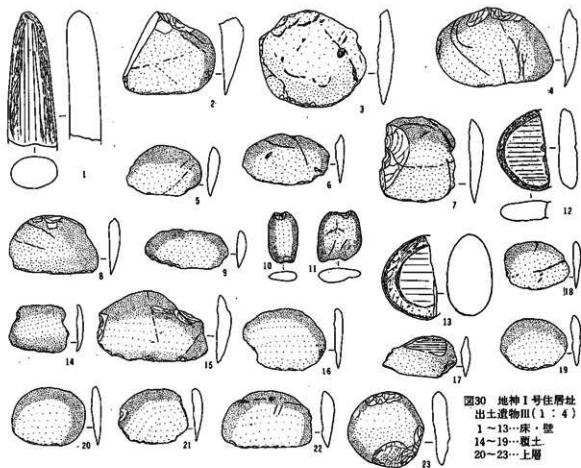


图30 地神I号住居址
出土遺物Ⅲ(1:4)
1~13...床·壁
14~19...覆土
20~23...上層

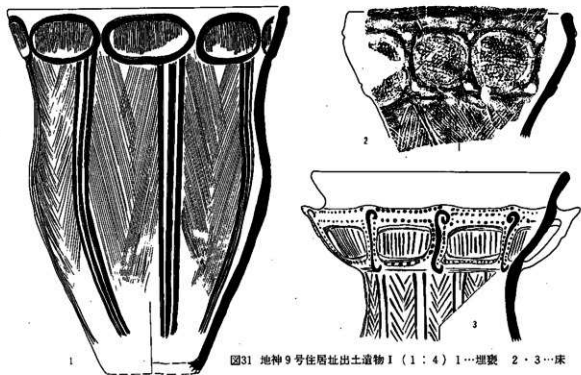


图31 地神9号住居址出土遺物I(1:4) 1...埋裏 2·3...床

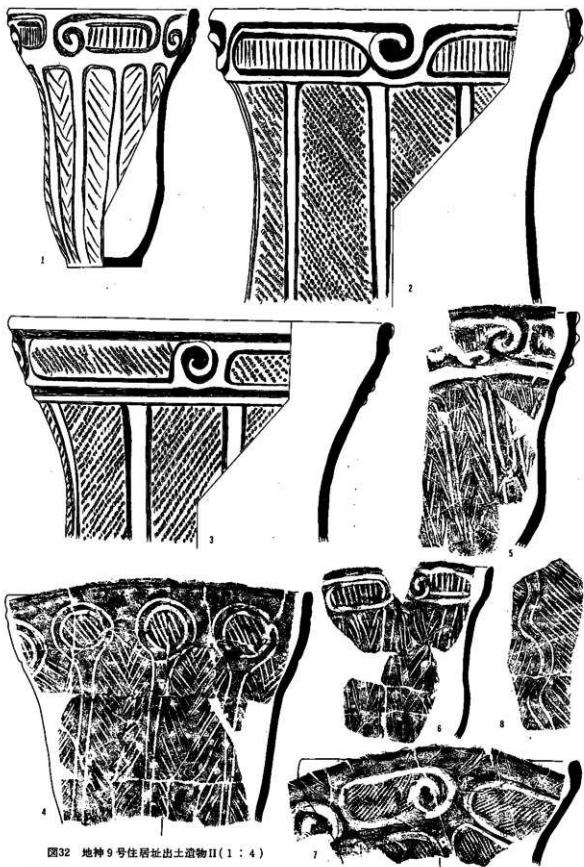


图32 地神9号住居址出土遗物II(1:4)

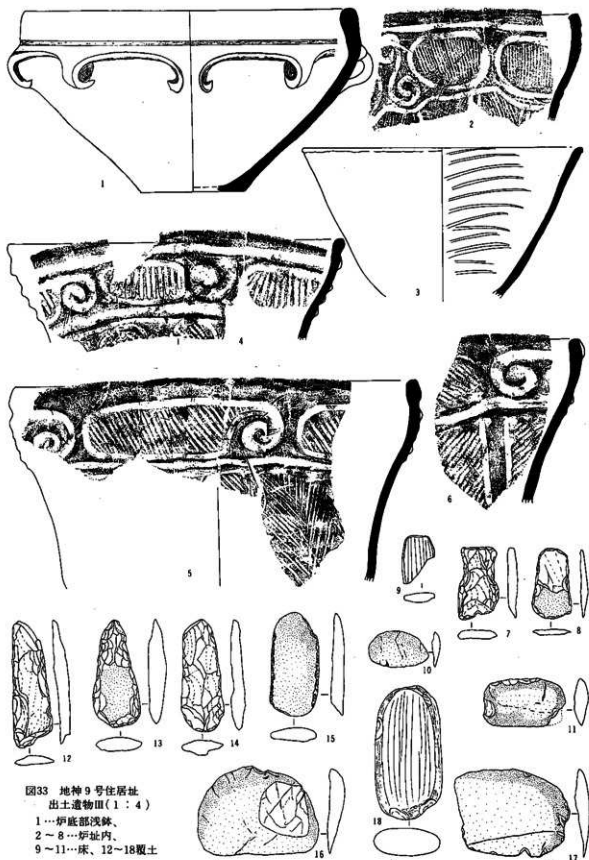


图33 地神9号住居址
出土遺物Ⅲ(1:4)

1…炉底部浅鉢、
2~8…炉址内、
9~11…床、12~18履土

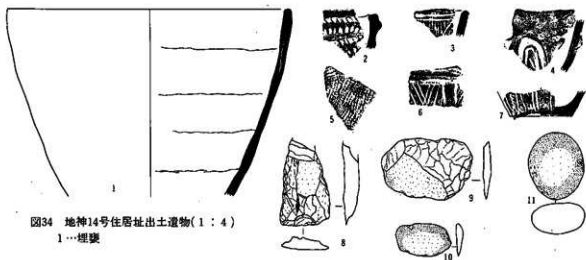


图34 地神14号住居址出土遺物(1:4)
1…埋裏

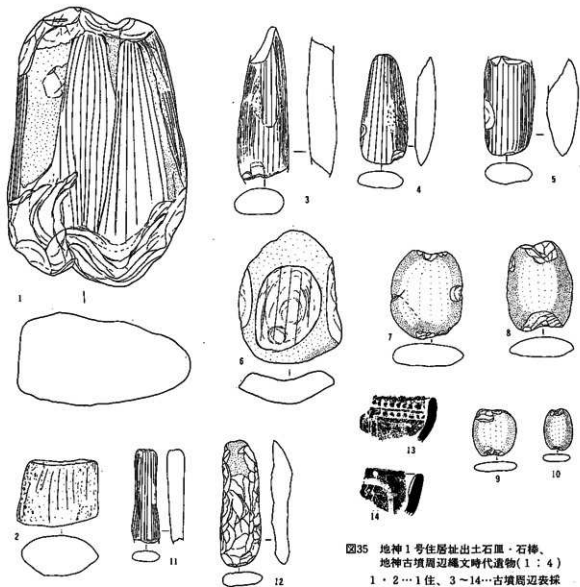


图35 地神1号住居址出土石皿・石棒、
地神古墳周辺縄文時代遺物(1:4)
1・2…1住、3~14…古墳周辺表採

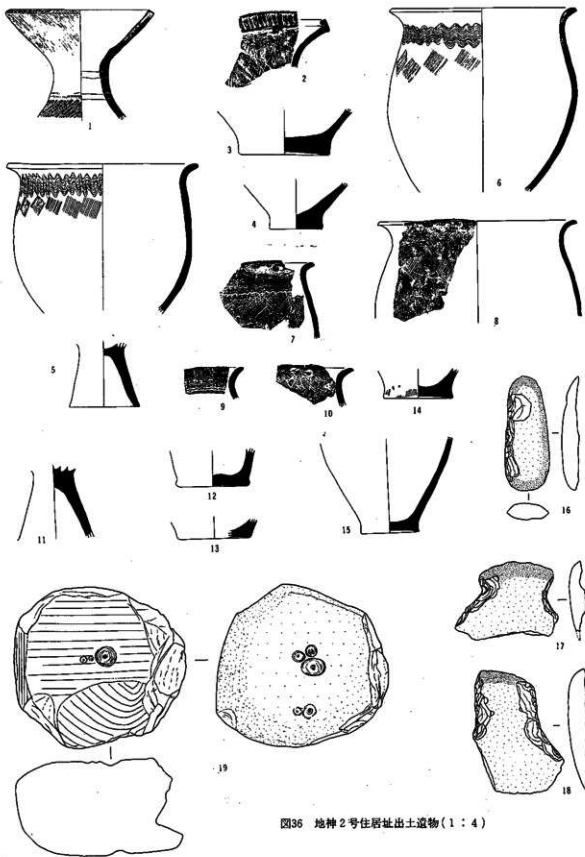


图36 地神2号住居址出土遗物(1:4)

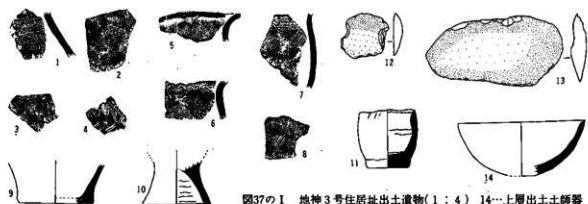


図37のI 地神3号住居址出土遺物(1:4) 14…上層出土土師器

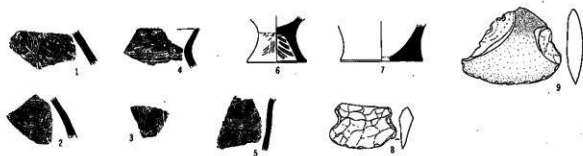


図37のII 地神5号住居址出土遺物(1:4)

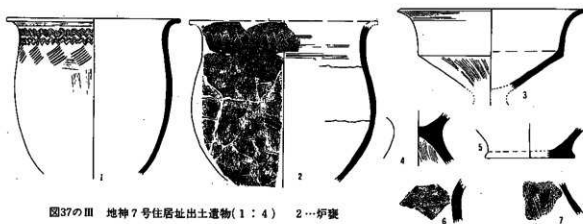


図37のIII 地神7号住居址出土遺物(1:4) 2…炉裏

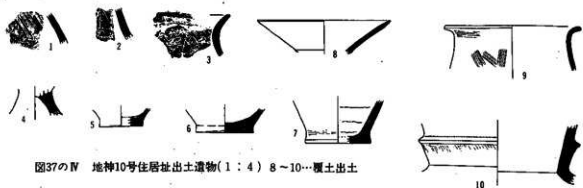


図37のIV 地神10号住居址出土遺物(1:4) 8~10…覆土出土

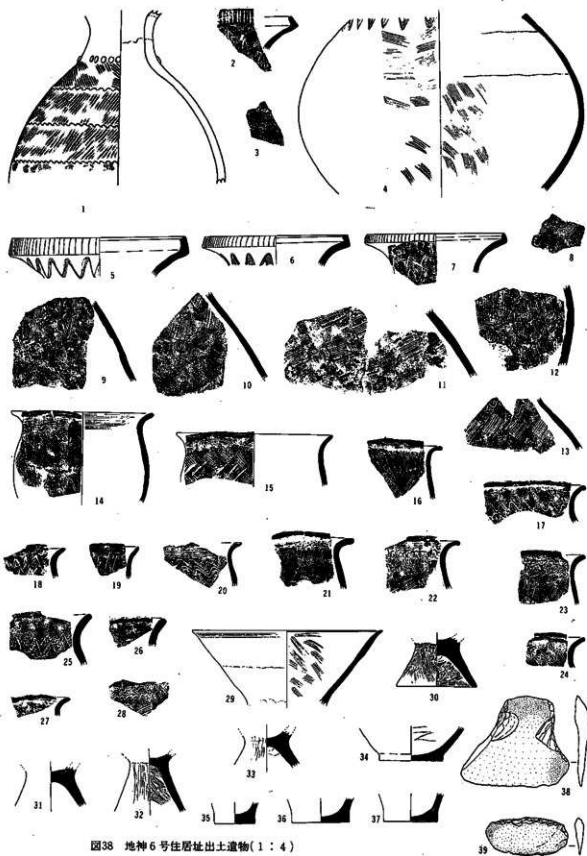


图38 地神6号住居址出土遗物(1:4)

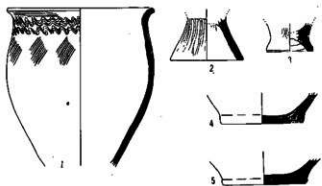
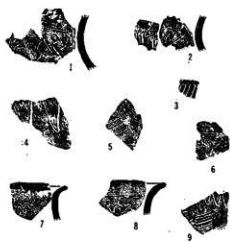


図39のII 地神12号 住居址出土遺物(1:4) 1…炉竈

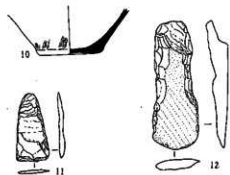


図39のI 地神11号住居址出土遺物(1:4)



図39のIII 地神13号住居址出土遺物(1:4)

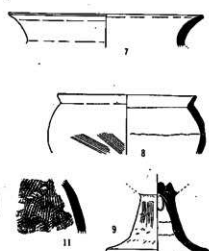
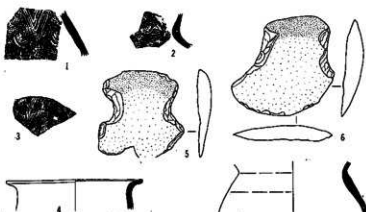
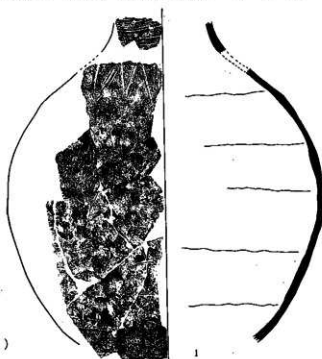


図40
地神15号住居址周辺出土遺物(1:4)
弥生後期(1~6)、古墳時代(7~11)

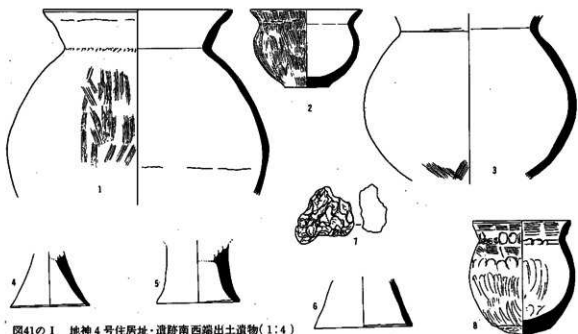


図41のI 地神4号住居址・遺跡南西端出土遺物(1:4)
1~7…4住、8…遺跡南西端

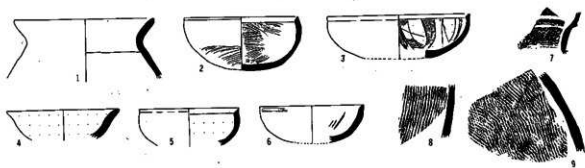


図41のII 地神19号住居址出土遺物(1:4)

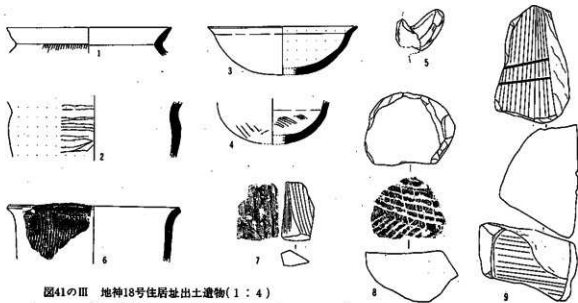


図41のIII 地神18号住居址出土遺物(1:4)

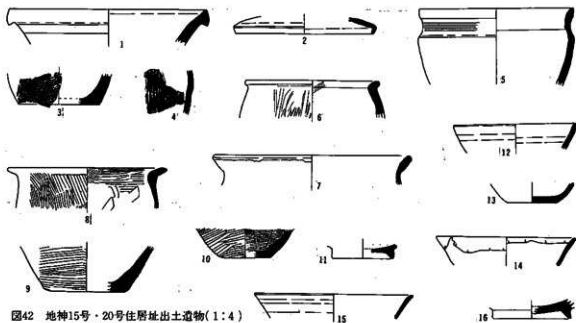


图42 地神15号·20号住居址出土遗物(1:4)
1~4...15住、5~16...20住

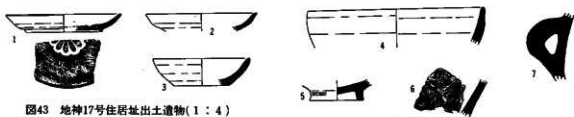


图43 地神17号住居址出土遗物(1:4)

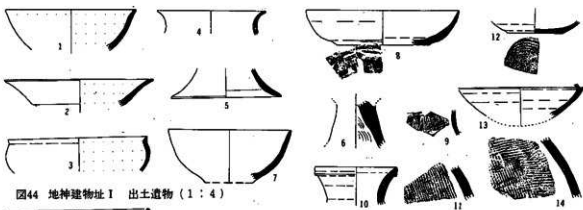
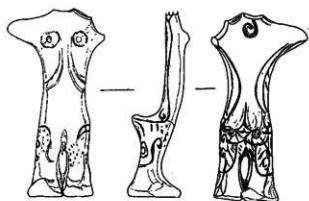


图44 地神建物址I 出土遗物(1:4)

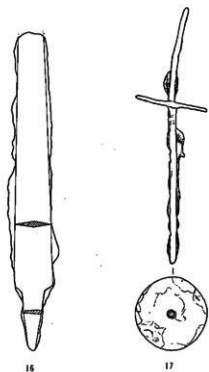


图45 地神土坑1号·2号·3号
出土遗物(1:4) 1~3...土1、
4~9...土2、10~13...土3



2

1



16

17



3



4



5



7



8



9



6



10



11



12



13



14



15



18



19



20

图46 地神遺跡出土土偶、小形土器・石器、鉄器 他(1:3)

1・3~5...9住、2...8住、6...14住、7~9...古墳北側、

10~12...4住上層、13~15...6住、16...18住、17...19住、

18~20...建物址I

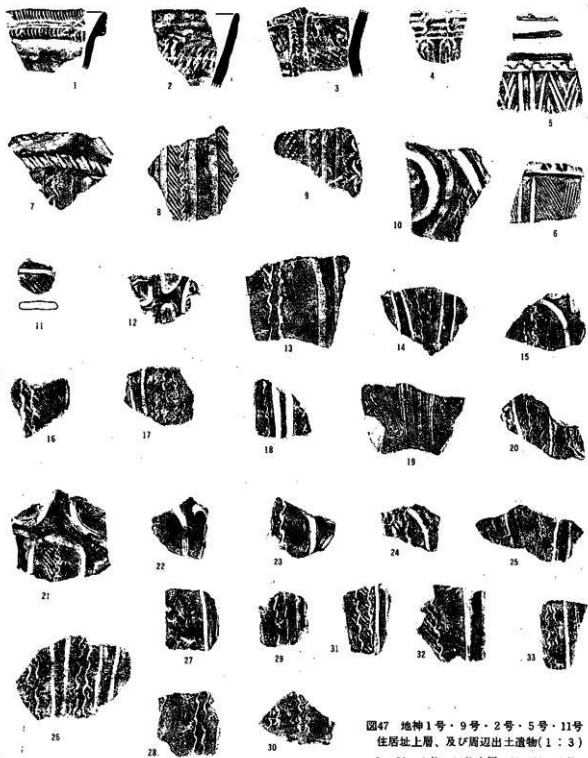


図47 地神1号・9号・2号・5号・11号
 住居址上層、及び周辺出土遺物(1:3)
 1~20...1住・11住上層、21~30...9住、
 2住・5住上層周辺

図版 I 遺跡



遺跡全景 (矢印)



遺跡近景—東から



遺跡近景—西から

図版II 遺構



遺構全景



遺構全景



遺構全景



1号住居址



1号住居址遗址



土城1号



14号住居址



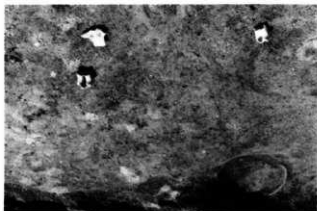
14号住居址埋藏



9号住居址



9号住居址炉址



9号住居址土偶出土



9号住居址埋葬と12号住居址炉裏



9号住居址埋葬



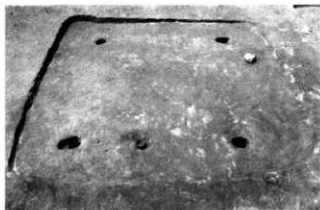
5号住居址



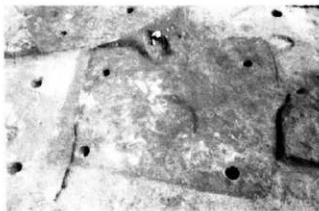
6号住居址



7号住居址炉裏



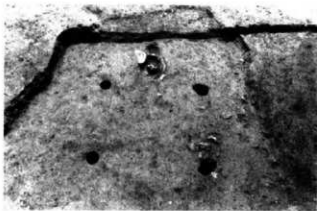
7号住居址



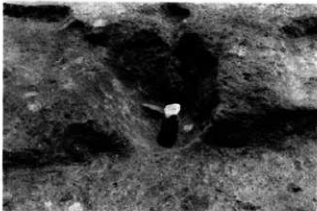
18号住居址



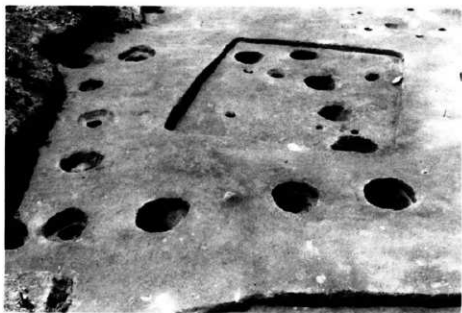
18号住居址かまど



15号住居址



15号住居址かまど



掘立柱建物址 I (東から)



掘立柱建物址 I (西から)



地神古墳北周溝



1号住居址土器出土狀況



17号住居址砾石出土狀況



伏襲出土狀況



18号住居址鉄剣出土狀況



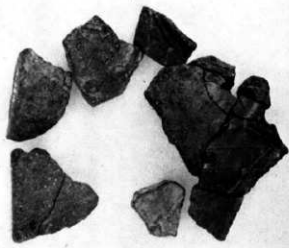
19号住居址紡錘車出土狀況



8号住居址出土石器



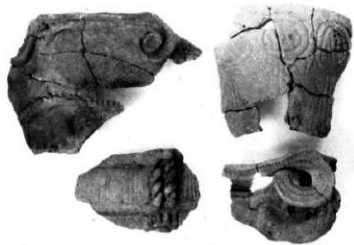
8号住居址出土石器



16号住居址出土石器



古墳周辺出土石器



1号住居址出土石器



1号住居址出土石器



1号住居址出土石器



9号住居址埋甕



1号住居址出土石皿



14号住居址埋甕



9号住居址出土土器



9号住居址出土土器



9号住居址炉の底部浅鉢



9号住居址出土土偶正面



9号住居址出土土偶背面



9号住居址出土土偶侧面



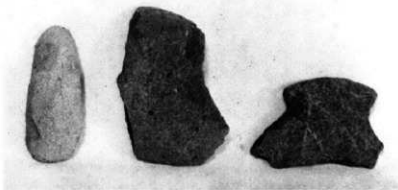
2号住居址出土甕



2号住居址出土甕口縁部文様



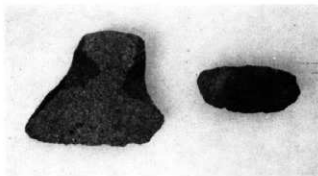
2号住居址出土菊川式壺口縁



2号住居址出土石器

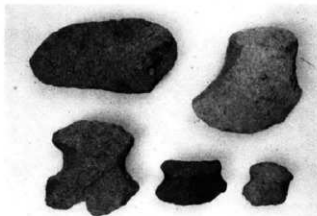


6号住居址出土菊川式壺



6号住居址出土石器(弥生後期)

左7住、右12住炉裏



弥生式石器

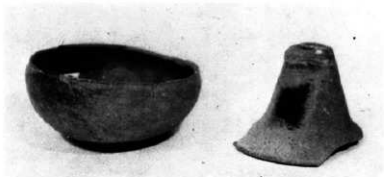
(左上・右下…3住、下中…5住、
左下…15住周辺)



4号住居址出土柄(左)、遺跡南西端出土甕



4号住居址出土甕



19号住居址出土土杯(左)、15号住居周辺出土高杯の脚部(右)



19号住居址出土鉄製紡錘車



掘立柱建物址出土鉄製品



18号住居址出土鉄剣



17号住居址出土砥石

図版Ⅳ 発掘スナップ



調 査 組 織

1. 地神遺跡発掘調査委員会

小池敬次	喬木村教育委員会委員長 (55年10月より)
宮下惠	" " (55年9月まで)
下岡輝男	喬木村教育長
矢沢宮治	喬木村教育委員
木下堅固	"
村沢百三	" (55年10月より)
原五郎	喬木村文化財保護委員会委員長
牧内文一	富田生産基盤総合整備事業実行委員会委員長
新井徳男	" 副委員長
木下隆一	" "
木下茂美	" "

2. 調 査 団

団長	佐藤 雅信
調査員	牧内佳子

3. 協 力 者

山下誠一	藤田典夫
------	------

4. 事 務 局

原義顕	喬木村教育委員会総務係長
鶴飼和男	" 社会教育係長
城田朝雄	" 社会教育係
横綱政恒	" 派遣社会教育主事

5. 作 業 員

福島明夫	北村重美	中平兼茂	伊原広隆
木下昌明	元島静雄	田中正憲	萩原富子
木下一郎	塚平定子	木下登美	小池秋夫
小木曾キクヨ	湯沢要一	市瀬久也	
遺物整理・整図			
佐藤いなゑ	田口さなゑ		

あ と が き

昭和55年度に農村基盤総合整備事業が富田地区五反田工区で実施されることに伴ない、この地区が地神遺跡として重要な埋蔵文化財の包蔵地であるため、事前に担当課である役場産業課と協議を重ね、県教委文化課のご指導を受けて発掘計画を立案し併せて発掘調査団の編成土地所有者の承諾等の諸準備を進めました。

調査事業費は総額250万円で、その70%を農村基盤総合整備事業費の中から負担金として喬木村教育委員会が受け、残り30%は文化庁及び県教委の補助金と村の一般財源で補なっている補助事業であります。

昭和55年1月14日事業計画書を提出、同年5月2日補助事業の内定を受けて5月15日補助金交付申請書の提出、5月26日文化庁へ発掘届の提出等事務手続きを経て7月21日より調査に着手しました。

富田地区には遺跡9、古墳5の沢山な遺跡古墳がありますが、発掘調査は今回の地神遺跡が初めてであり、地神古墳の周囲の地表からは多量の土器石器が散見されてきたことことから調査には大きな期待をもって当りました。

調査は基盤整備事業が夏場施行で行なわれるため発掘調査を急ぎ7月21日より8月28日の酷暑炎天下で汗を流し真黒に陽やけて作業が進められました。

調査に当られた団長の佐藤先生を始め作業員の方々の熱心な調査と土地所有者の深いご理解ご協力とによって作業が順調に進められたことは本当に有難いことであります。

出土品の整理は、佐藤いなゑ氏の手によって極めて整然適切に処理がされ田口さゑ氏のトレースの協力と相まって報告書作成の基をつくって頂だいたご労苦に対しても深甚の感謝を表します。

先年実施した伊久間原遺跡牛原遺跡群に続いての地神遺跡、村の大きな遺跡調査の報告書作成が総べて佐藤団長の手によって成された功績を大きく讃え感謝を申し上げます。

出土品については関係各官庁に届出を終へ、現在喬木村歴史民俗資料館に展示保管してあります。

昭和56年3月

喬木村教育委員会

地神（じのかみ）遺跡

1981・3

発行 長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 株式会社 秀文社
